

「改革者ヒゼキヤ」

Ⅱ列王記 18:1-3

【1】序

聖書を読んでいくと、そこには人間の罪が赤裸々に記されていることに気づく。確かに聖書には神の聖さ、義、愛、従うべき規範が記されているのであるが、そのほとんどは人間の罪に歪んだ姿とそれを取り扱われる神のことばが記されている。旧約聖書は特に神の民イスラエルがいかに罪深いのかを知ることになる。しかし、忍耐深くあわれみ豊かな神は、そのような罪人をご自身のもとに近づけ、救ってくださる。この神の救いが聖書の中心である。

神はそのようなご自身のあわれみにすぎる者をほうっては置かれず、祝福へと導いてくださるのである。しかし、私たちが自らその祝福をストップさせてしまうことがある。それは、主なる神を見失うことによってである。神の選びの民、イスラエルもそうであった。主の目ではなく、他の目、神以外の何か私たちが心を支配してしまうとき、私たちは躓き、主の祝福を十分に得られないのである。

【2】ヒゼキヤ

今日からヒゼキヤに注目しながら主の目にかなう信仰者の生き方を学びたい。彼に対する聖書の評価は3節にあるように「主の目にかなうことを行った」とある。

ヒゼキヤについては、Ⅱ列王記 18～20 章、イザヤ書 36～39 章、Ⅱ歴代誌 29～32 章に記されている。さらに、旧約聖書以外にもテイラー・プリズムと呼ばれる古代アッシリヤ帝国の碑文にもその名が記されている。ヒゼキヤの生涯を鑑みることによって、現代の私

たちも主がいかなるお方であるか、あわれみと愛に富んでおられる主を知ることができるのである。

【3】歴史の中での位置

ヒゼキヤが南ユダ王国の王になった時代はイスラエルにとって混迷の時代であった。このような時代に預言者たちも活躍している。それは、彼らが外国や他の神々ではなく主を頼りとするようにと信仰を復興させるためであった。ヒゼキヤの父アハズはアッシリヤに同調した政策を取り、国内に偶像礼拝を持ち込んだ。また、姉妹国である北イスラエル王国の王ホセアはアッシリヤに対抗するためにエジプトを頼りとした結果、裏切られアッシリヤによって首都サマリヤは陥落してしまう。

彼らがとった政策は一国の指導者としては間違っていなかったのかもしれない。しかし、彼らはイスラエルの主の目を無視していた。一方ヒゼキヤの政策は外国にとっては愚かなように見えるものであった。彼はイスラエルの主に頼ろうとし、何よりも信仰復興を図ったのである。

【4】結論

アッシリヤとエジプトという強国に囲まれた小国イスラエルにとって彼らはいつも周りの国々の動き、その目を気にしていた。しかし、そのような国々はイスラエルを愛し助けるどころか支配しようとしていたのである。真の平和を与えることはなかったのである。

今日、私たちは誰の目を見ながら生きているだろうか、誰を恐れ、誰の目を気にしているだろうか。考えなければならぬだろう。私たちが真に愛し、あわれみをもって救ってくださるお方はただお一人である。